

地域資源としての産業遺産の活用について —講座「千葉県の産業遺産とその活用を考える」の実施を通じて—

*小笠原永隆

Nagataka OGASAWARA

要旨： 今年度、本館では「千葉県の産業遺産とその活用を考える」と題し、座学と巡検を交互に実施する計5回の連続講座を実施した。テーマについては「利根川の水運と産業」及び「千葉県の天然ガス・ヨードの利用」を設定し、それぞれ座学と現地巡検を行った。巡検では、産業遺産の見学に加え、「まち歩き」的な要素も取り入れたが、受講生の反応は良く、町の発達についても興味を持つ様子が見られた。本講座では、産業遺産それ自体の活用にとどまらず、その遺産がその場所（地域）にある理由についても考える機会を持つことをねらいとしており、一定の成功を収めたといえる。今後は、当館が産業遺産を「地域づくり」に活用するための具体的なノウハウの開発し、マネジメント機能を有することが求められると考えられるが、これを受講生とともに考えていくことが課題である。

キーワード： 産業遺産 地域資源 地域づくり 地域経営 マネジメント

1 はじめに

千葉県の産業遺産の活用に関しては、小笠原(2011)が、主に産業観光の観点から、全体的な動向を把握したうえで、トピックス的に県内現状を見つつ、本館としては博物館としての資料蓄積に加え、活用に向けたストーリー構築やマネジメント機能を持つべきであることを今後の課題として指摘した。

本稿では、本館で平成23年度に実施した講座(本稿執筆の段階ではまだ開講中)をケーススタディーとして、課題を再認識するとともに、県内の産業遺産活用に向けた具体的な方策について考察を行っていくこととする。

2 講座「千葉県の産業遺産とその活用を考える」について

(1) 概要

今年度は初年度ということもあり、上半期は内容検討に費やし、平成23年9月から募集開始し、10月から実際の講座を開始することとなった(図1)。月1回の開講を基本としたが、12月は行事が集中することから開催しないこととし、3月までに計5回を開催することとした。「座学①⇒現地①、座学②⇒現地②、まとめ」という構成をとり、2つのテーマを設定したうえで、知識を習得した

図1 講座募集チラシ

後に、必ず現地で関連する遺産を見学することとした。

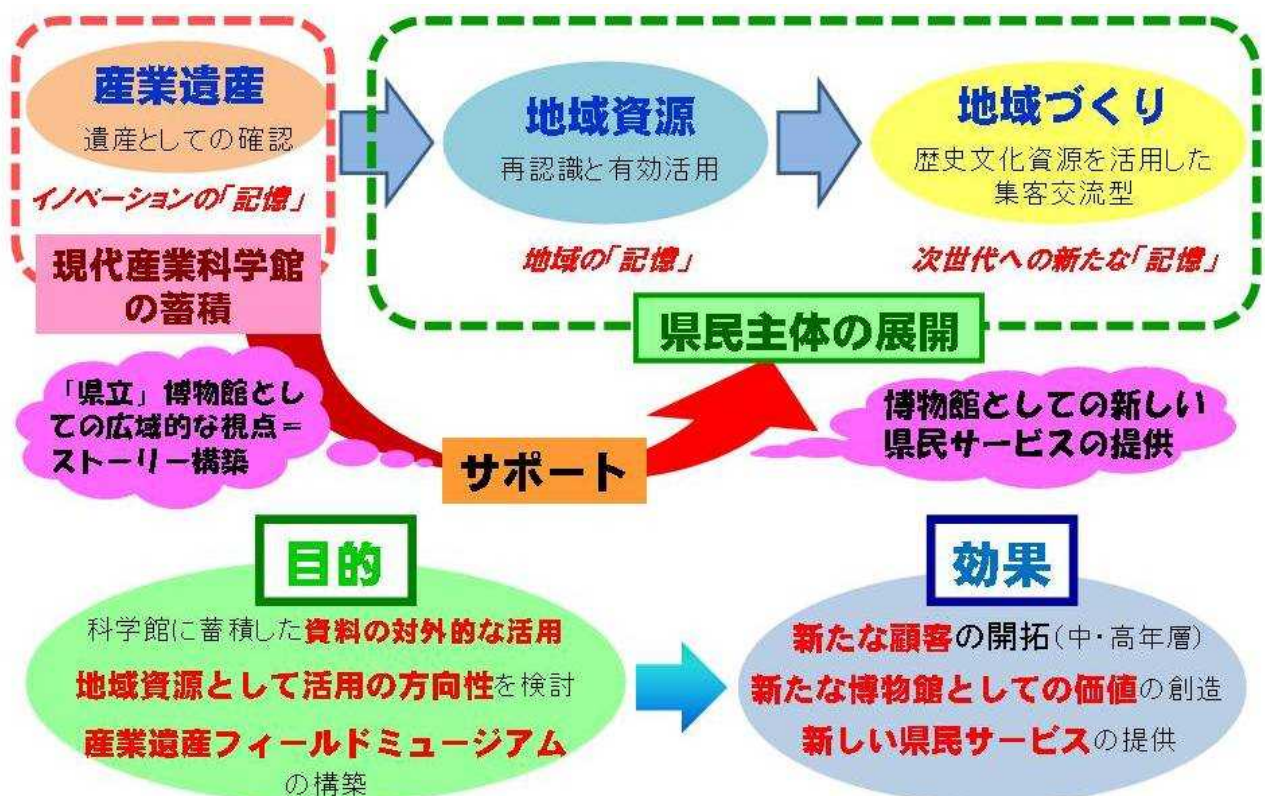


図2 講座実施イメージ

さらに、現地では単に遺産を見るだけではなく、関連する工場の見学を行って、現在につながっている状況を把握するとともに、地域全体がどのように発展していったのかと考える契機となるようなコースを作成するように心がけた(図2)。実際の内容は次のとおりである。

テーマ①「利根川の水運と産業」

座学：「利根川の水運と産業の発達」(講師 県立中央博物館大利根分館 内田主席研究員)

巡検：銚子市(竜の井(玄蕃井戸)、ヒゲタ醤油工場見学)・香取市佐原地区(小野川沿いの町並み見学, NPO 法人小野川と佐原の町並みを考える会 高橋賢二氏による講話)

テーマ②「天然ガス・ヨードの利用」

座学：「ヨード生産から見る千葉県の特性」(講師 本館 阿由葉上席研究員)

「関東地下水盆と天然ガス」(講師 県環境研究センター 風岡主席研究員)

巡検：茂原市(昌平町天然ガス第一貯蔵場, 関東天然瓦斯茂原鉱業所見学), 大多喜町(天然瓦斯井戸発祥の地, 現地ボランティアガイドによる街並み案内)

(2) テーマ①「利根川の水運と産業の発達」

本テーマの座学では、主に近世以降、東遷以降の利根川水運について、近代・現代に至るまでの産業・交通が発達していった様子が多角的に解説された。その知識を踏まえ、銚子・佐原という利根川水運により発展した町の巡検を行った。銚子では、のちのヒゲタ醤油につながる醤油醸造家である田中家の十代玄蕃が醤油の需要増加に対応するために、1868年に設置したレンガ造りの井戸「竜の井(玄蕃井戸)」(図3・4)を産業遺産として見学した。



図3 竜の井(玄蕃井戸)① ※筆者撮影(2011年)



図4 竜の井（玄蕃井戸）② ※筆者撮影（2011年）



図7 香取市佐原で講話を聴く受講生

さらに、ヒゲタ醤油(株)の銚子工場において現在の醤油生産の様子を見た(図5)。



図5 工場見学の様子（ヒゲタ醤油）

佐原では醸造業・水運業で栄えた歴史的街並み(図6)を見学するとともに、その町並み保全・活用に力を注ぐ地元NPO法人の方に取組みを解説していただいた(図7)。



図6 佐原の歴史的町並み ※筆者撮影（2011年）

(3) テーマ②「千葉県の天然ガス・ヨードの利用」

テーマ②の座学では、まず、本県におけるヨード生産の歴史について時代背景を交えながら、歴史学及び人文地理学的な視点からの解説がなされた。次に、本県の天然ガス埋蔵状況について、最新の現地調査結果を交えて自然科学分野からの解説がなされた。

これらの内容を踏まえたうえで、茂原及び大多喜という天然ガスと歴史的にも深い関わりをもつ町の巡検を行った。茂原では、明治末に天然ガスの採掘・貯蔵・供給を行う地元住民の組合が設立されたが、その関連施設の一つである「昌平町天然ガス第一貯蔵場跡」(図8)を産業遺産として見学した。



図8 昌平町天然ガス第一貯蔵場跡

※筆者撮影（2011年）

さらに関東天然瓦斯(株)茂原鉱業所において、現在の天然ガスの生産等の様子を見た(図9)。



図9 工場見学の様子（関東天然瓦斯）

大多喜では、天然ガス利用が始まるきっかけとなり、関東天然瓦斯（株）発祥の地となった井戸跡を産業遺産として見学した（図10）。



図10 天然ガス井戸発祥の地 ※筆者撮影（2012年）

さらに、大多喜の町並みについて、地元のボランティアガイドの方に案内・解説をお願いした（図11）。



図11 町並み見学の様子（大多喜）

（4）受講生の参加動機と反応

最終回（平成24年3月10日）にまとめとなるミニワークショップを行い、全体の意見集約を図るが、ここでは第4回巡検終了時までの状況について記すこととする。

あらかじめ、全回出席を前提とし、巡検参加に伴う移動費用などすべて自己負担とするなど、参加条件が厳しかったこともあるが、受講生の意識は概ね高く、座学・巡検ともに熱心に取り組む姿が見られた。参加申し込みに当たって、簡単なヒヤリングを行ったところ、参加動機は様々だが、多くに共通する要素として「産業遺産への興味」があった。また、階層としては9割が65歳以上の男性であった。つまり、技術系・事務系にかかわらず、何らかの「産業」に携わってきた経験が、「産業遺産」の興味へとつながっていることが推察される。

さらに、テーマに「活用」を掲げていたことから、「地域づくり」を動機としていたかたも少数ながら見受けられた。退職したことで「会社から地域」に戻り、初めて自分の住んでいる「地域」を見渡し、考えたり調べ始めたりする例が多いことは、各所で言われている通りであるが、その傾向が当てはまっていると思われる。今回の講座では、巡検時にあえて「まち歩き」的な要素を組み込んだ。「産業遺産」がなぜその場所にあるのか、ということに参加者全員で考える機会をつくるねらいがあった（図2）。このことを抜きにした「活用」は、とかく表面上のものになりがちである。「産業遺産」を単体のものとしてとらえるのではなく、「地域」の中の一要素として考えたときに「まちづくり」のヒントが芽生え、単なる歴史資産とか観光スポットではなく、重層的「活用」に発展する可能性が一気に広がると考えたからである。

この結果、巡検中も多くの受講生から、見学した「産業遺産」の管理や活用の現状に加えて、「町」の発達した理由についての質問を多く受けた。「産業遺産」と「町」の関連性におぼろげながらも興味を持ち始めた結果と考えられる。最終回のワークショップで、この点について議論を進化させることができれば、当初の狙いへと近づくのであるが、それはファシリテーションを行う主催者側の力量不足もあり、まだ難しいかもしれない。

3 産業遺産の活用におけるマネジメントの必要性について

グローバル化が進む昨今の状況では、様々な「地域」が実質的な存亡の危機にさらされている。いかに「地域」が「地域」として自らの意志をもって行動し、住民主体の仕組みを構築する（＝地域づくり）ということが課題として突き付けられているのである。

地域づくりに「集客・交流」は大切な要素であり、そのための観光資源的な役割を担うものとして、産業遺産を活用することは、もちろん欠かせないことである。しかし、単に集客装置としてしまった場合は、何らこれまでの「収奪型」とかわらず、いずれニーズとかみ合わなくなり、資源は「枯渇」してしまう。つまり、飽きられたら終わり、ということである。それを産み出す「必然」（「風土」がそれに該当すると思われる）を担い手が意識し、地域が持続するための「要素」のひとつとして「活用」しなければならない。

いわゆるB級グルメを例にとれば、現在のブームによって戦略的な売り出しをすれば、ある程度のブレイクは確実性が高いといえよう。多くの地

域計画や観光のコンサルタントが、高い料金を取り、たいがい最初にB級グルメについての提案する理由もここにある。手っ取り早く成果を上げることができ、地域側も参考例が多く、比較的实施しやすい。しかし、それ自体が存在する明確な理由がなければ一過性のものになってしまうだろうし、提供する担い手となる「地域住民」が原料生産、流通、調理、接客、広報などあらゆる場で、主体的にかかわる形をつくらなければ、今までの「観光（関連業者のみが直接的な利益を享受する形）」と何ら変わりがない。つまり、「B級グルメ」を「地域づくり」という大局のための手段、という位置づけにしなければ、持続的な地域の確立には程遠くなってしまいうのであるが、多くの地域では長続きしないような気がしてならない。

最近では、産業遺産は言うに及ばず、考古学的な遺跡や歴史的建造物などの文化財を観光に活用する動きが多くみられる。文化庁も史跡の活用を推進しており、観光の多様化にも対応するヘリテージ・ツーリズムとしても、情報発信さえうまくやれば一定の人気を得られるものである。しかし、「B級グルメ」と同様に「大局」を留意しなけれ



図 12 今後の展開イメージ

ば、単に過去にはやっていた観光施設の看板をつけ変えたに過ぎず、いずれ閑古鳥が鳴く「お荷物施設」になってしまうことは容易に想像できる。

話が大きくなりすぎているのではないかと指摘されるかもしれないが、要は地域住民による「地域経営」の問題である。地域住民が自らの手で「地域」を「経営」するためのノウハウを習得し、基本計画及び体制をつくる。その時に初めて、産業遺産をはじめとする様々な「地域資源」を持続的な有効活用ができるようになるのではないだろうか。この壮大ともいえる目標を実現するためには、牽引のコアとなるメンバーの出現が望まれる（一般的に「よそ者・若者・馬鹿者」が良いとされる）が、同時に地域資源の把握、組織づくりや経営手法等についてサポートするとともに、道筋をつけ、誘導するマネージャーが必要不可欠となる。

では、その時当館をはじめとする博物館等の施設が果たせる、いや果たすべき役割は何であろうか。小笠原（2011）において述べたことの繰り返しになるが、専門の見地からのアドバイスにとどまらず、それを土台にして地域資源を活用するためのマネジメントである。特に県立である当館には、個々の資源活用というよりは複数の市町村にまたがる広域的な展開はもちろんのこと、場合によっては隣接都県の博物館等施設との連携も期待されよう。さらに、地域で実際の活動を担う、ある程度の専門的知識を持った人材の育成も重要な役割であると考えられる。

4 おわりに

本稿執筆時点では講座が終了していないことから、参加者の意見集約ができておらず、はなはだ主観的な分析を行わざるを得なかった。これまでの受講生との意見交換から、大枠は外していないと思われるが、意見集約後の追分析の必要性を痛感している。

来年度は、この結果を受けて課題解決のための一試行として、さらに充実した講座の開催が求められることとなる。今年の講座はまだまだ一方向性が強いものであり、受講生による実作業を増やした双方向の講座とするべきであろう。そうすることで、受講生の参加意欲を高めら得るだけでなく、様々な意見や考えを引き出すことで、新たな方向性を産み出すことが期待できるからである。

まだまだ試行錯誤の段階ではあるが、改良しつつ講座を継続していくことで、本館のマネジメント機能を高めるために受講生とともに考える仕組みをつくっていきたいと考えている（図 12）。

参考文献

- 大下茂：「人の気を惹く地域づくりへの取組みの知恵・手法～地域の記憶を手掛かりに、地域経済文化おこしによる地域力を高める技をみがく～」、千葉県総合企画部政策推進室（2007）
- 日本大学生物資源科学部（糸永浩司・日暮晃一・藤沢直樹ほか）：「鴨川ホリスティックツーリズム～鴨川市観光振興基本計画～」、鴨川市（2007）
- 平井東幸・種田明・堤一郎：「産業遺産を歩こう」、東洋経済新報社（2009）
- 大下茂：「行ってみたい!と思わせる「集客まちづくり」の技術」、学陽書房（2011）
- 小笠原永隆：産業遺産の活用と現代産業科学館の役割について－特に産業観光の観点から－、「平成 22 年度千葉県立現代産業科学館研究報告」17（2011）